

GLA 随想 9 千年構想

GLA を憂う元会員

2013年7月20日 第1版

目次

1	はじめに	1
2	先生から頂いたテーマ	2
2.1	歴史に学ぶ後智慧	2
2.2	はたらきの布陣	5
3	GLA 千年のヴィジョン	8
3.1	願い：仏国土、最終ユートピアの建設	8
3.2	大目的：千年の伝承を果たす	8
3.3	中目的：2049年までに伝承の基礎を整える	11
3.4	小目的：2029年までに高橋信次先生の法を復活する	12
3.5	目標：2019年までに7つのプログラムを介在としてはたらきの布陣を整える	14
4	あとがき	15

1 はじめに

GLA 誌の中で「千年構想」という言葉が初めて登場したのは 1999 年 11 月号 54～85 ページの記事「GLA 魂共同体千年構想の始動」であったようです。その後、「千年構想」という言葉は GLA 誌の中で、あるいは GLA の場において頻繁に見受けられるようになりました。

過去に「千年構想」の具体的なテーマとして、八ヶ岳の講堂棟・人生祈念館の建設、総合本部会館の建設、コミュニティ・デザイン 2001 の具現などが発表されました。これらのテーマは、何れも十年程度で完了することであり、実際にほぼ完了しています。

しかし、その後「千年」という長きに渡って GLA 共同体が何を果たしてゆくのかビジョンが全く示されていません。「7つのプログラム」の中にも“「GLA 千年構想基金」の充実”というプログラムがありますが、現状のままでは何のために基金を充実させなければならないのか解らないのではないのでしょうか。

「千年」という長きに渡るビジョンがなぜ示されないのか、その原因を考えてみたいと思います。上述の GLA 誌の記事によれば、高橋佳子先生は千年構想の始動において「宇宙に流れる因縁果報のはたらきの布陣に就く」というテーマを下さいました。しかし、「はたらきの布陣」というものが如何なるものであるのか、弟子が検討を重ねた形跡は見られませんので、おそらくこの「はたらきの布陣」なるものは現時点では形成されていないのではないのでしょうか。その通りであるとする、「千年」という長きに渡るビジョンが何も出てこないことは至極当然の結果であると考えます。

そこで、このレポートでは、先生から頂いたテーマを改めて振り返るとともに、千年のビジョンを描くことに挑戦してみたいと思います。

なお、上述の GLA 誌の記事は、千年構想を検討してゆく上で重要なものですが、持っておられない方も多いのではないかと思います。私が記事の全文をコピーしてインターネット上で公開することは問題があるものと思いますので、どなたかに GLA 公式 Facebook ページにてアップロードして頂ければと思います。

2 先生から頂いたテーマ

2.1 歴史に学ぶ後智慧

GLA 誌 1999 年 11 月号（以下単に「GLA 誌」と呼びます）62～63 ページには「人類がこれまでの歴史の中で、どのように神理を伝承し、共同体を守ろうとしてきたのか——。その歩みをしっかりと受けとめることが千年構想を考える上でとても大切である」という先生から頂いたご示唆が示されています。そして、GLA 誌の中では、「今井町」、「伊勢神宮」、「キリスト教伝承の智慧」という三つのテーマについて職員の方々が検討された内容が発表されています。以下、発表された内容について、簡単に要約させて頂くとともに、私が考えておりますことを認めさせていただきます。

今井町について

奈良県橿原市かしはらしの「今井町」は、室町時代末期から浄土真宗（一向宗）じないちようの寺内町（寺院を中核とする宗教都市）として繁栄しましたが、現在ではその信仰を基とした風土や文化を見つけることは難しく、かつて信仰の中心であった称念寺しょうねんじは、修理もされず崩れかかった姿のままになっているということでした。

今井町は、誕生してから十数年後に織田信長軍にの侵略を受けました。町の人々は、石山本願寺とともに戦いますが、ついには降伏して武装解除することになりました。その結果、町は焼失を免れるものの、町そのものの存立基盤の変節を余儀なくされました。信仰を取るか、町の存続を取るか——ぎりぎりの選択を迫られた結果、今井町は宗教都市としての性格を失っていったということです。

GLA 誌に掲載された後智慧の内容は「共同体創設のとき、どのような願いが込められているか。そして、何を拠りどころに選択を連ねてゆくのか——。志の原点において一点の濁りも妥協もあってはならない」というものでした。

この後智慧の内容は正しいと思いますが、さらに付け加えると、今井町の事例には「政治力など、この世的な力とは訣別すべき」という呼びかけが響いているのではないかと思います。GLA の会員数がさらに増加してゆきますと、

GLA が政治力を発揮することも可能になってくると思われます。しかし、政治力を持ってしまうと、それに対抗しようとする人、それを利用しようとする人などとの関わりが生じ、本来的な方向から段々とずれてしまうのではないのでしょうか。

伊勢神宮について

伊勢神宮という場には、神との出会い、その一点に向けて様々なステップがつくられており、大鳥居をくぐり、長い参道を通って正宮に向かうまで、心身を浄化し整えてゆく場所が設けられているということです。また、二十年に一度、神殿の場所を移り替える「二十年遷宮」というシステムが作られており、それは神殿のみならず、伊勢神宮にあるすべての別宮や社、果ては神官の衣服に至るまでゼロから作り直すということです。

伊勢神宮の事例については、「千年構想」に対してどのように活かすのか、GLA 誌には記載が見当たりませんでした。伊勢神宮の事例から呼びかけられていることは、おそらく「新たないのちを込める」ということではないかと考えます。

高橋佳子先生は、「現代の日本人」に対して、最も解り易い形で神理を説かれているように見受けられます。しかし、時代が進んで社会情勢などが変わってきますと、先生が現在説かれている内容のままでは、時代が求めるテーマにそぐわなくなってゆくことが予想されます。また、日本人なら誰でも知っている日本の歴史や風土などに基づいて説かれた内容は、外国人にとって、なかなかわかり辛い点があるのではないのでしょうか。

例えば、三つの「ち」について考えてみますと、日本人の三つの「ち」についてなら、GLA には多くの事例が集まっていますが、そのままを外国人の方々に説明したとしても、外国人の方々は三つの「ち」というものを実感的に理解しづらいのではないかと考えられます。例えば、フランス人に対しては「フランスに流れる三つの「ち」」の事例を挙げる必要があるのではないのでしょうか。

従って、「変わらぬ神理」を千年に渡って世界中に伝承してゆくためには、土地と時代の要請に応じて、「新たないのちを込める」「新たに神理を説き直す」ということが必要になるものと考えます。

キリスト教伝承の智慧について

キリスト教の伝承の智慧については「崩壊の定、不随の定が吹き荒ぶ忍土にあって、どれほど風化と形骸化の危機を迎えようとも、『イエスに倣い、イエスに還る』——つまり、どこまでも徹底して自らを砕き、イエスの心をわが心として、イエスの分身としてのはたらき、イエスの体としての教会に立ち還ろうとした先人たちの志高き歩みこそ、伝承のいのち——」ということが紹介され、「まさに、先生に倣い、先生に還ることの大切さを改めて確信する思いだった」と結ばれています。

この点は正にその通りであると考えますが、上述の「新たないのちを込める」「新たに神理を説き直す」という必要性に鑑みれば、さらに深い意味が見えてくるのではないかと思います。先生の説かれた内容は、「二十世紀から二十一世紀にかけての日本の言語、文化、風俗、社会情勢」ということが「前提条件」になっており、この「前提条件」を熟知した上で、「なぜこのような形で神理を説かれたのか」を知ってゆくことが「先生に倣い、先生に還る」ために必要ではないでしょうか。

それが果たせるからこそ、異なる「前提条件」（土地と時代の風土）の下で如何に神理を説いてゆくのか、その智慧を獲得することができるのではないのでしょうか。

2.2 はたらきの布陣

上述の GLA 誌には、千年構想を果たしてゆくための「はたらきの布陣」について、次のような文章が掲載されています。

- ・ 先生は、…私たちが魂共同体千年構想を果たしてゆくためには、神の御心を因とする、宇宙に流れる因縁果報のはたらきの布陣に就くことが大切、と促して下さいました (66 ページ)。
- ・ まず「因」とは、言うまでもなく神の御心、そして先生の御心です (66 ページ)。
- ・ そして、「縁」とは、もったいなくも私たちであるとおっしゃっています (67 ページ)
- ・ そして、その先生のお心を因とするはたらきの布陣に就くことによって、宇宙に因縁果報の流れを発現することができる、つまり宇宙そのものの深化に私たちが貢献させて頂ける、ということになります (67 ページ)。
- ・ 私たちが本当に神の御心を現す因縁果報の布陣に就くこと。一つひとつの細胞にいのちがこもったときにこそ、GLA 千年の礎、千年構想の土台がしかとその場に現れる (68 ページ)

GLA 誌に掲載された文章のうち、どこまでが先生のお言葉であり、どこまでが弟子の解釈であるのか判然としない面もありますが、少なくとも「因」として「先生の御心」を含めたのは、弟子の解釈であると考えて間違いないものと思われます。

しかし、私は「はたらきの布陣」の中に先生を含めることは誤りであると考えます。それは、「因」であるにせよ「縁」であるにせよ、「はたらきの布陣」の中に先生を含めてしまいますと、「先生から具体的、明示的なご指示を頂けるであろう」との希望的推測を生んでしまいます。そのことは、「弟子の智慧を結集しようとしなさい」という態度を生んでしまい、「具体的、明示的なご指示頂いたことを除いて、何も進まない」という結果につながります。「お世話構造の十年ヴィジョン」「7つのプログラム」「千年構想」の何れにおいても、

そのような結果が現れているのではないのでしょうか。

私は、具体的、明示的なご指示を頂くことを含めて、先生のご助力は絶対に必要であると考えています。しかし、ご助力を頂く前に弟子の力を結集して「100%の力を出し切る」ということが必要ではないのでしょうか。ご助力を頂くタイミングやご助力の内容は先生にお任せして、「弟子の側からは、一切のご助力を期待しない」という覚悟を決めることが必要ではないかと思えます。

そのような観点から、「神の御心を因とする、宇宙に流れる因縁果報のはたらきの布陣」について考えてみたいと思えます。

神の御心を因とすること

神の御心を「因」として「縁」となって働くためには、「神の御心に共振すること」が不可欠になります。それは、言葉を変えると、「神との一体化を果たしてゆく」ということになります。そのことを実現してゆく最適な方法は、「GLA 随想8」のレポートで報告させて頂いた「霊操行」に親しんで頂くことではないかと思えます。

因縁果報の流れを発現すること

神との一体化を果たしてゆくことによって「青写真にアクセスする力」は確かに育まれてきますが、それによって「千年構想の青写真に一人でアクセスできるか」と考えますと、それは不可能であると考えます。なぜなら、「千年構想の青写真」は、非常に長い期間に渡るものであり、内容も多岐に渡るからです。

しかし、「千年構想全体の概要」や「一部についての青写真」であれば、ある程度ならば一人でアクセスできる可能性があります。そうしますと、誰かがアクセスした青写真を参考にして、別の人が詳細な青写真や、別の青写真にアクセスできるようになる可能性が出てきます。

例えば A さんという人が、「千年構想全体の概要」について青写真にアクセスし、それを発表したとしましょう。これは、神の御心を「因」とし、A さんを「縁」として、「千年構想全体の概要が開示される」という果報が生じたこととなります。

次に、B さんという人が、A さんの発表を見て、ある分野について詳細な青

写真にアクセスし、それを発表したとしましょう。この場合、BさんにとってAさんの発表は、神の御心に到達するためのある種の「よび水」のような役割を果たしたことになります。しかし、Bさんが発表した青写真は、「Aさんが発表した青写真の詳細を詰めたもの」ではなく、「Bさんと神との一対一の関係においてアクセスした青写真」です。つまり、神の御心を「因」とし、Bさん「縁」として、「その分野について詳細な青写真が開示される」という果報が生じたことになります。

このような連鎖を続けることが「宇宙に因縁果報の流れを発現する」こと、「一つひとつの細胞にいのちがこもる」ことであり、「GLA千年の礎、千年構想の土台がしかとその場に現れる」という全体的な果報を生み出してゆくことではないでしょうか。

3 GLA 千年のヴィジョン

3.1 願い：仏国土、最終ユートピアの建設

「GLA 千年のヴィジョン」について、ウィズダム構成にて検討を進めていきたいと思っております。ウィズダム構成では、最初に千年かけて果たしてゆく「願い」を明確化することが必要になります。そして、千年かけて果たしてゆく願いとは、次のようなことではないかと考えます。

願い：仏国土、最終ユートピアを地上に顕現する

この「願い」は、「神の栄光と人間の尊厳が真に生きられる自由の国を創造する」とも表現できるでしょう。私達にとって、この「願い」が具体的にどのようなことであるのか、詳細な内容を想起することはなかなか難しく、漠然としたイメージを抱けるに過ぎないかもしれません。

しかし、きっと私達の魂は、この願いをリアリティを持って想起することができるでしょう。そのことを信じ、この願いに向かって私達は一步一步、歩みを進めてゆくことが呼びかけられているのではないかと思えるのです。

3.2 大目的：千年の伝承を果たす

「千年の伝承を果たす」とは、GLA 誌の 68 ページ「○魂共同体のいのち」の項に掲載されていること（先生・神理を千年守る、先生・神理を世界の果てまで伝える）を指します。

実は、「大目的」として「千年の伝承を果たす」を置くことが正しいのかどうか迷いました。他に「創造の秘儀の復活」（「創造の秘儀」とは「ディスカバリー」のイントロダクションに示されている内なる創造の力のこと）、あるいは「地獄滅消」など、他にも大きなテーマがあるためです。これらのテーマは、GLA 誌の記事中にも登場しますが、あまり大きく取り上げられておらず、また、私自身にもよく解らない点が多いため、本レポートでは「千年の伝承を果たす」ということを「大目的」に置きました。

千年の伝承を果たすためには、私は「教義の三層構造」というものが必要で

はないかと考えます。それは、GLA の教義を「原典」「ローカライズした神理」「導入教義」の三層から構成するというものであり、それぞれについて以下説明します。

原典

「原典」とは高橋佳子先生が説かれた神理そのもの、およびそれを忠実に翻訳したものを指します。「歴史に学ぶ後智慧：伊勢神宮」の項（3 ページ）に記しましたように、現代日本に生きる私たちにとって「原典を学ぶ」ということは、とても自然なことですが、時代が進んで社会情勢などが変わってきますと原典の内容が時代にそぐわなくなり、また、原典は外国人にとってわかり辛い点があります。

従って、時代の経過とともに、「原典」は「普通の会員の普通の学び」には、あまり使われなくなってゆく傾向が強くなっていくのではないかと予想されます。

しかし、「先生に倣い、先生に還る」ことを志す方、特に土地と時代の要請に応じて、「新たないのちを込める」「新たに神理を説き直す」責任を担う方々は、「二十世紀から二十一世紀にかけての日本の言語、文化、風俗、社会情勢」を熟知した上で「原典を学ぶ」という事を果たして頂く必要があります。

ローカライズした神理

「変わらぬ神理」を千年に渡って世界中に伝承してゆくためには、土地と時代の要請に応じて、「新たないのちを込める」「新たに神理を説き直す」ということが必要になりますが、そのような形で「神理の説き方」を変えることを「ローカライズ」という言葉で表現することにします。

「普通の会員の普通の学び」に使われる教材は、ローカライズしたものが中心になってくるものと考えられます。

ここで、「ローカライズ」ということに共感できない方がおられるかもしれませんが、その必要性についてさらに説明させて頂きたいと思えます。

例えば「佳子先生が 300 年前のロシアに出生されていたらどうなっていたらろうか？」と想像されてみるといかがでしょうか。先生は、300 年前のロシア

の方々を相手にして、「300年前のロシアに流れる三つのちが如何なるものであるのか」、また「300年前のロシアにおける諸問題に如何に対処すればよいのか」という事などを説かれていたと思われます。この仮定の下では、先生が説かれた内容は、現代日本の諸問題について、直接的な処方箋になるものではないという事が御理解頂けると思います。神理の本質そのものは時代を超えて変わらないものではあります、現代日本の諸問題は、現代日本に生きる私達弟子が処方箋を示さない限り、何も解決しないのではないのでしょうか。

以上申し上げたことは、これから世界中で現実に起こってゆくことであり、「その土地と時代の風土に根ざしたローカライズが実施されない限り、その場で神理は広がらない」という事がお解り頂けると思います。

導入教義

現在では「ある人が GLA 会員になる」ということは、その人ひとりの判断に基づいて為されることですが、先生・神理を世界の果てまで伝えるためには、「集団帰依」ということを促進する必要があるものと考えます。

すなわち、他の教団（ここでは「〇〇教団」とします）を、教団ごと「GLA 〇〇本部」として受け入れるということです。集団帰依が実現する状況を考えてみますと、相手側教団において「教団首脳部が集団帰依の方針案を打ち出し、半数以上の会員がそれに賛同した」という場合ではないかと思われます。

しかし、半数以上の会員が集団帰依に賛同したとしても、「今まで通りの信仰を続けたい」と思う人々は必ず存在するはずであり、その教団の教義を、「原典」または「ローカライズした神理」に一気に変えてしまうと、その人々は脱落してゆくしか道はなくなります。

「導入教義」は、集団帰依した教団の全員に道をつけてゆくための教義であり、その教団の従来教義をできるだけ尊重しつつ、それを「神理」に結び付けてゆくものです。例えば、その教団で「親を大切にする」という教義があったとします。しかし、親に対してわだかまりを持ってしまい、親との関係が振れてしまっている人もいます。その場合、「親との関わりにおいて、心が動いたときに止観シートに取り組み、つぶやきを発見し、浄化する」ということは「親を大切にする」という教義を守ることでもあるし、「神理実践」で

もあることとなります。

「できるだけ導入教義を離れて原典またはローカライズした神理に移行して頂きたい」という願いは大切ですが、それはあくまでもお一人お一人の判断に委ねてゆくことが必要ではないでしょうか。このように、GLA が「集団帰依に際して脱落者を一人も出さない」という実績を積んでゆきますと、まだ集団帰依していない他の教団に安心感を与え、それは新たな集団帰依という結果へとつながってゆくように思えます。

「導入教義」は、集団帰依した教団の元の教義に密着するものであるため、GLA の教義は時代の経過とともに「千差万別」とも言える広がりを持ったものになってゆくものと思われまます。

3.3 中目的：2049年までに伝承の基礎を整える

神理の「ローカライズ」についても、「導入教義の設計」についても、大部分は高橋佳子先生の御帰天後に果たされてゆくことであり、先生からご指導を頂けない状態で進めなければなりません。従って、何れについても御帰天前に「一つの事例」については、先生のご指導を頂きながら完了させ、その際のご指導の内容をその後の展開の指針として残しておく必要があるのではないのでしょうか。

高橋佳子先生がいつ御帰天されるのか解りませんが、創立 80 周年の年（2049年）に御帰天されると仮定しますと、中目的は次の通りになるのではないのでしょうか。

中目的：2049年までに伝承の基礎を整える。

- ・ 少なくとも一つの他教団の集団帰依を実現し、導入教義を設計する。
- ・ 少なくとも一つの外国において、神理のローカライズを完成させる。

ここで、集団帰依を実現してゆくプロセスについて考えてみたいと思います。まず、集団帰依を実現してゆくためには、他教団との間で交流を深めて信頼関係を築いてゆく必要があります。また、他教団から注目を集める必要もあり、これは「GLA 随想 6」のレポートにて報告させて頂いたように、「GLA と法華経の関係を明らかにする」ということが必要ではないのでしょうか。

他教団の信頼関係が深まってきた後、「集団帰依」ということを考える前に、他教団の教義に反しない部分について、他教団に神理を一部導入して頂くことが妥当ではないでしょうか。これによって「神理の確かさ」ということを他教団の方々に実感して頂くことができると思われますので、その後で「集団帰依」に進むのか否かの判断をして頂くことが最適ではないかと考えます。

次に、神理のローカライズについて考えてみます。一つの外国において神理のローカライズを完成させるためには、先智慧・実行・後智慧のサイクルを何度も回しながら、青写真に迫ってゆく必要があります。そのような取り組みを果たしてゆくためには、その国において相当数の GLA 会員が揃っている必要があるように思います。

現在の GLA の海外拠点は、主として現地に在住する日本人または日系人が多くを占めているものと見受けられます。しかし、「ローカライズ」は現地のネイティブな方々を対象とするものですから、ネイティブな会員を増やしてゆく必要があります。そのためには、外国語版の月刊誌を発刊し、海外拠点を充実させてゆくなどの準備が必要であると考えます。

3.4 小目的：2029 年までに高橋信次先生の法を復活する

私は、「7つのプログラム」について完遂の目処が立った頃に高橋信次先生の法を復活させ、神理を学ぶ場を再び一つに統合してゆく必要があるのではないかと考えます。GLA の分派は、ある意味では「他宗教」とも考えることができますが、そうすると教義面において GLA に最も近い「他宗教」ということになりますので、導入教義を設計することを考えたときに、最も取り組みやすい事例ではないかと思われま

す。また、信次先生が御帰天された後にはかなり期間が経過しましたので、信次先生の法に「新たないのちを込める」必要もあるのではないかと考えられます。これは、外国にてローカライズを果たしてゆくための格好の鍛錬の介在になるのではないのでしょうか。

信次先生の法を復活することは、「7つのプログラム」が完遂した後、10年程度で果たせることではないかと思われま

の復活は、2029年までに完遂させるべきものと思われます。すると、小目的は次の通りになるのではないのでしょうか。

小目的：2029年までに高橋信次先生の法を復活させる。

信次先生の法を復活させるにあたっては、「憑依問題」についても道を付けてゆく必要があるものと考えます。信次先生の御著書には憑依問題について多くのページが割かれています。佳子先生の御著書にはほとんど見受けられません。憑依に悩む方々にとっては憑依問題こそが最も切実で重要な問題であると思われますので、佳子先生の法に見向きもせず信次先生の法を求める方々の中には、憑依問題に対する解決を求めておられる方々が相当におられるのではないかと推測されます。

「憑依問題に対する解決」と言いますと、「超常的な力を使った浄霊」ということが思い浮かびますが、信次先生は超常的な力を使わない方法についても開示しておられます。「悪霊 I」の106ページには次のような御文章があります。

ノイローゼで自分の心を地獄霊に支配されている者は目を開いたまま、自分の丸い心を想像させ、本来の自分に帰るための方法を個別に指導した。ノイローゼで悩む者に反省を求めても普通はできない相談であり、無理にそれをやらせると、地獄霊が表面に浮かび上がり、本人の心はそれに支配され、ノイローゼが一層危険な状態になる。

ノイローゼ患者と一週間も二週間も起居を共にすることはできないし、そうすると本人の心次第で、かえって悪化させることになるからだ。この場合には、心が比較的安定している時に、反省をするようすすめる。

「本来の自分に帰るための方法を個別に指導した」というのは、当時は神理の体系が整備されていなかったため、信次先生の個別指導に頼るしかなかったのだと思いますが、現在であれば「受発色の傾向を確認する」ということで、弟子にも果たせることではないかと思われます。また、「目を開いたまま、自分の丸い心を想像させ」というのは、現在であれば「目を開いたまま、受発色の傾向に応じた菩提心を瞑想する」ということが、一層望ましいものと思われ、これも弟子が同伴を果たせることではないかと思われます。

3.5 目標：2019年までに7つのプログラムを介在としてはたらきの布陣を整える

私は、上述のように「7つのプログラム」は2019年までに完遂させなければならないものと考えていますので、その理由をまず説明します。2010年の善友の集いの事を覚えておられますでしょうか？事前に頂いたパンフレットには、「来るべき10年のヴィジョンを共に分かち合い、自らの魂に刻まれた願いを想いを馳せ、皆様と共に新たなる一步を踏み出してゆきたいと願っています」とのご案内がありました。しかし、当日のプログラムでは、「来るべき10年のヴィジョン」について何一つとして分かち合われることはありませんでした。おそらく、パンフレットのご案内文は先生のご指示によるものと思われませんが、弟子が「来るべき10年のヴィジョン」の案をご提出しても先生がことごとく却下され、しかも何が正しいヴィジョンであるのか御指導を下さらなかったのではではないでしょうか。

7つのプログラムが最初に発表されたのは、2008年の善友の集いの場でした。それ以降、先生から直接的にご指示頂いたことを除けば、ほとんど何も進捗していないように見受けられます。そのような状況下で「来るべき10年のヴィジョンは何か？」と問われたとき、「7つのプログラムを完遂する」という事がまず冒頭に挙げられなければならないのではないのでしょうか。

ここで、千年構想について高橋佳子先生から「神の御心を因とする、宇宙に流れる因縁果報のはたらきの布陣に就く」というテーマを頂いたことを思い出しますと、7つのプログラムは「はたらきの布陣」を構成してゆくための介在であると考えられます。従って、目標は次の通りになるのではないのでしょうか。

目標：2019年までに7つのプログラムを介在としてはたらきの布陣を整える。

7つのプログラムに関する具体的なお提案内容は、これまで発表させて頂いた通りです。

4 あとがき

本レポートでは、千年構想について私が考えておりますことを発表させて頂きましたが、千年の伝承を果たす上で「弟子が神理を説く」ということが如何に大切であるかご理解頂けたのではないのでしょうか。

これによって、「霊操行」が如何に大切であるかということもご理解頂けるのではないかと思います。高橋佳子先生のお言葉と寸分たがわぬ言葉を自らの心から紡ぎだせるように神、先生との一体化を果たしてゆくこと。そのことこそ、表面的な先生のお言葉にこだわらず、自在に神理を説く智慧を育むということではないのでしょうか。

以上